

文部科学省大学教育再生加速プログラム（AP）

「リベラル・アーツ教育のアセスメント・モデル  
構築による学修成果の向上と可視化」

外部評価報告書

2019年10月

東京女子大学「AP事業」外部評価委員会

## 外部評価委員会名簿

うらの みつと  
浦野 光人氏

りそなホールディングス 社外取締役

かがみ ひさが  
鏡 久賀氏

富士ゼロックスインターフィールド株式会社  
代表取締役社長

すずき のりひこ  
鈴木 典比古氏

国際教養大学 理事長・学長

なかむら まさこ  
中村 雅子氏

東京都市大学メディア情報学部 教授

(委員は 50 音順)

2019年9月30日

文部科学省 AP 事業採択

「リベラル・アーツ教育のアセスメント・モデル構築による学修成果の向上と可視化」  
に対する評価結果

外部評価委員 浦野 光人

### 【総評】

リベラル・アーツ教育の学修成果を可視化、各指標間の関連に分析を加え、それらを教育内容の革新に活かす PDCA が組織的に回っている。その結果、学士課程教育の質保証がなされ、自ら考え、知識や能力を行動に移す「専門性をもつ教養人」を育成する本学の最終目標に限りなく近付いている。

### 【優れている点】

(1) 本事業は全学的な教職協働のもと教育研究開発委員会が全体を統括し、機動力を持つ2つのプロジェクトチームが置かれたこと。さらにこの2チームは自己点検・評価委員会の下に設置されている IR 専門委員会と連携していること。また事業期間終了後も自己点検・評価委員会の下に小委員会を設け、アセスメント・モデルを運用し、検証と改善を繰り返していくことが決まっていること。

(2) アセスメント・モデルは3 × 3のマトリックス・多元的評価で示され、極めてわかりやすい。さらにアセスメント指標は、直接的指標として GPA や TOEFL ITP のみならず他大学と比較可能なものとして PROG テストを採用、間接的指標では各アンケート・インタビューに加え、ここでも他大学と比較可能なものとして ALCS にも目を向け、できうる限り客観性を保とうとした努力が認められる。これらの指標とディプロマポリシーを対応させたアセスメント・プランは秀逸である。

(3) 間接的指標である学生に対する学修行動調査アンケートや卒業生・企業調査の内容を直接的指標と絡めて分析し、早速教育課程の変更に役立てたこと。中でも「挑戦する知性科目」は刺激的である。

(4) 内発的「熟達目標」は主体的な学習を増加させ、その結果、成長の自覚が得られるとの分析結果は極めて重要である。「熟達目標」へ学生の目を向けさせるような教育改革に全学のベクトルが合った事は大きな成果である。

(5) 卒業研究を学士課程の集大成と位置づけ、目標とする資質・能力を身に付けることができたかをルーブリックを用いて評価し、学生が自らの課題に取り組み、問題解決につなげていく能力、姿勢の育成を図っている。学生も自分の成長を自覚し卒業研究の成果を享受している。

#### 【努力課題】

(1) 「東京女子大学グランドビジョン」を強く反映したはずの副専攻制度の履修率が高くない事は残念である。カリキュラムを見直し、副専攻からの発信力を高めて欲しい。

(2) 直接的アセスメント指標や学修行動調査を通じて、学生との双方向コミュニケーションが取られていることは多とするが、これにとどまらず教学マネジメント改革のために設けられた各委員会等に学生が参加すれば、さらなる深まりも期待できるのではないか。

以上

2019年 9月 30日

文部科学省 AP 事業採択

「リベラル・アーツ教育のアセスメント・モデル構築による  
学修成果の向上と可視化」に対する評価結果

外部評価委員 鏡 久賀

**【総 評】**

本事業は、リベラル・アーツ教育の学修成果可視化により教育内容の充実と向上へつなげる仕組みの構築という挑戦的な目標を掲げた活動である。可視化にあたって、教養教育の目標を3領域に設定し、直接・間接指標を用いた3×3の多面的評価モデルを枠組みとし、在校生、卒業生、他大学、社会（企業）まで広く検証を行い、多面的なデータ収集と複合的分析結果が蓄積された。また、その結果を教育改革につなげる取組も、既に始動している。アセスメント・モデルの有効性を今後も継続して高めていくという認識に立ち、検証結果の活用と継続改善の基盤を築いた本事業は、一定の成果をおさめたものと評価する。

複雑化、高度化する社会環境の中で、東京女子大学には、人間らしい構想力、基礎を柔軟に応用する汎用的な力を発揮できる、所謂“Society 5.0”を実現する女性を輩出する教育機関であり続けて頂くことを期待する。

（優れている点）

1. 本事業の成果を定着化する組織体制

本事業期間終了後も自己点検・評価委員会小委員会が指標の改善を継続し、IR 専門委員会が実施・分析を担うという、アセスメント・モデルを運用実施する組織体制が整備されている。この体制により、本事業の成果は全学的な内部質保証体制の中にルーティン化されることとなる。

2. アセスメント結果を教育改革に活かす実践

本事業の成果を2018年度教育課程策定に活用し、「大学として育成する人物像」に対応した科目開設、必修単位数増、アクティブ・ラーニング必修化等が実行に移され、事業成果を教育改革に活かす取組が始動している。

（努力課題：今後の取組への期待）

1. 東京女子大学の特色ある教育成果を可視化する指標への進化

本事業で設計された指標を、東京女子大学の特徴である「専門性をもつ教養人」育成

の成果向上に活かすための指標へと進化させることが望まれる。2018年度カリキュラム改正の実効性検証の過程において進められるものと期待する。

## 2. キャリア形成支援への活用

東京女子大学の教育の特徴は、リベラル・アーツ教育による学部教育全体がキャリア教育と位置づけられている点にある。学士課程での学びを通じ、生涯にわたって社会に貢献できる自立した女性を育成するというビジョンである。在学中に磨かれた、主体性、実行力、課題設定・解決能力、創造力といった社会人基礎力は、キャリア形成支援を通じて社会で発揮される。本事業の成果がキャリア支援の場でも活用されることを望む。

以上

2019年 9月 30日

文部科学省 AP 事業採択

「リベラル・アーツ教育のアセスメント・モデル構築による  
学修成果の向上と可視化」に対する評価結果

外部評価委員 鈴木 典比古

【総 評】

- リベラルアーツ教育を「専門知識」「汎用的能力」「態度・志向」というプロセスの進化と達成に位置付け、その学修成果の向上と可視化に結び付けるという企画は非常に原理的正当性を持ち、先進的である（8頁）。

（優れている点）

- 自己点検・評価委員会の下に小委員会を設置し、その活動をルーティン化させていくとする方針は高く評価できる（18頁）
- リベラルアーツ教育の成果を多角的観点から複数の指標に基づいて評価を行なうことは評価の公平性と客観性の維持からも大切である（7頁）
- エビデンスに基づいた評価を教育改革に結びつけている（16頁）
- 学外学修時間も目標を24時間/週と掲げていることは十分であろう（11頁）
- 「アセスメントプラン」の実施は期待できる。他大学のモデルになりうる（14頁）

（努力課題）

- なし

2019年9月21日

文部科学省 AP 事業採択

「リベラル・アーツ教育のアセスメント・モデル構築による  
学修成果の向上と可視化」に対する評価結果

外部評価委員 中村雅子

【総 評】

当初、本 AP 事業で目指していた目標は概ね達成されており、実際に成果が可視化、把握されていることを高く評価します。

中間評価の段階において、組織・体制の整備、アセスメントの前提となる 3 ポリシーの連携の強化、正課教育についての GPA の活用とその前提としての成績評価の平準化、ルーブリックに沿った授業展開等、取り組みの基盤となる部分がきちんと整えられていることを確認させて頂きましたが、それらの基盤の上に、今回の成果が示されていると考えます。

事業体制についても実効性のある 2 つのプロジェクト・チームを中心に機動的に取り組みが行われており、事業としての期間終了後への継続的な仕組みづくりも確認されました。

学生の取り組みによる変化については、今後年次を追ってデータが蓄積される途上にあるとのことですが、すでに自主的学習時間の伸長（自己申告）などの形で示されているものもあります。この事業のもとで指導を受けた学生の卒業とその後の社会的活躍によって最終的にはこの事業の成果が確認されるものと思われませんが、今後も貴学の取り組みが継続され、さらなる成果が生まれることを期待します。

（優れている点）

1) 取り組みへの組織づくり：教職員が一体となって組織化された「教育研究開発委員会」が置かれ、学長のガバナンスのもとで取り組みへの全学的体制が整っています。

2) アセスメントモデルの工夫：アセスメント・ポリシーに基づいて 3×3 のマトリックスを設定し、多面的に測定する工夫が見られます。成果の可視化のために一方では TOEFL ITP、PROG、学修行動調査などを活用し、他大学や外部の大規模サンプルとの比較によって自校のデータの相対的な評価を行っています。加えて独自尺度を作成して大学の特色となる教育についても把握に努めています。これらの構築されたモデルに基づいて着実に事業を推進していると考えます。

3) モデルに基づく着実な事業の推進：豊富なデータに基づいて丁寧に検証・分析が行われており、中でも「熟達目標」と「成績目標」の学習成果への変数としての機能の仕方については結果に共感するところが大きかったです。得られた知見は学生に熟達目標をいかに持つてもらうかという、広い意味での学習環境のデザインについて示唆に富んでいると考えます。



4) 教育への成果：モデルに従って改善された施策によってすでに多くの教育的改善・成果が見られます。

( 今後への期待 )

1) 継続的な効果の検証：実施中にカリキュラムの変更が行われたため、その変更を含めた効果はこれから明らかになるとのことでしたので、成果の検証については今後、継続的に検討されるものと考えます。

2) 施策への取り組みコストの低減：教職員および学生の調査・試験疲れを低減するために、アセスメントのメリットをより積極的に伝えていくことや、吟味を踏まえた測定の簡素化なども並行して試みられるとよいかと思えます。

また指標の一つである PROG については、キャリア支援に活用予定だがキャリアカウンセラーに PROG の理解周知がまだ十分できてない ( p.10 ) との記述がありました。今後、この取り組みも推進されることを期待します。

以上